

看護学部完成年度を迎えるにあたり（雑感）

豊田 淑恵*

Celebrating the Completion of the School of Nursing (Miscellaneous Impressions)

Toshie TOYODA*

1. はじめに

駒沢女子大学看護学部は2022年3月末をもって完成年度を迎えます。そこで、この紙面をお借りして、看護学部誕生秘話から遡り、完成年度を迎えるまでの6年間で回顧したいと思います。

2. 看護学部設置までの2年間

2016年3月某日、前々任校時代の友人より退職後の予定を聞かれました。「年金生活を夢んでいる」と告げたところ、「駒沢女子大学が看護学部設置を考えている。協力してほしい」と1本の電話から本学部完成年度まで関わることになりました。

当時、理事長兼学長の光田督良先生（現理事長）、理事の安藤嘉則先生（現学長）、そして吉村総務部長（現事務局長）の熱意あるお誘いにより、現小児看護学担当の山口明子先生と私とが「看護学部開設準備室」に採用となりました。

「縁は異なるもの味なもの」とのことわざは多くは男女の出会いに関して使われますが、「人の出会いは非常に奥深く、味のあるものだ」との意味があります。この「縁」は「えにし」とも読み、元は仏教用語で「巡り合わせ」という意味があり、また「結果として何かを生じさせ

る原因となるもの」という意味もあります。振り返ってみますと、駒沢女子大学は駅伝で有名な駒澤大学と思ひ、また設立者が曹洞宗永平寺の僧侶であることなど、まったく知らずの状態でしたが、これもご縁があったことを実感しました。

私たちの使命は2年間で看護学部を開学できるようにすることでした。しかし、医学部・付属病院がないこと、医療関係学部がないこと、最寄駅からの交通アクセスが悪いこと、また看護学部が全国に280校以上設置されている状況下で開学準備することに教員や学生を集めることができるのか、との不安がよぎりました。それでも引き受けた以上結果を出さねばなりませんので、今まで4か所の新設大学に携わった経験と人脈で何とか乗り切れるのではないかと、の楽天的な性格をもって動き始めました。

1) 人の縁のありがたさ

まずは今までの人脈をたどり、実習施設の開拓、看護の専任教員集めを始めました。と同時に文科省申請書類作成などにとりかかりました。文章にすると「作成しました」との一行で終わりますが、そう簡単ではありませんでした。実習施設はどこでもよいわけではなく、また人材も

*駒沢女子大学 看護学部長

誰でもよいわけでないためです。いかに良き仲間を得るか、いかに患者のために質の高い看護をとともに考え、未来の仲間を育てたいと考えている施設を得るかが一つの施設選びの課題でした。そのため、足を使い施設開拓から始めました。幸いにもかつての恩師、先輩、同僚、教え子たちに恵まれたことを実感し、看護学専門教員のみならず一般教養・専門基礎の先生方の支援・協力を得ることができました。これぞまさしく「縁は異なるもの味なもの」として、人の縁、巡り合わせを実感しました。本当に感謝です。

特に実習施設においては、過去に勤務した大学の卒業生たちが主任・師長クラスに成長し、病院との実習受け入れの窓口を担当し、大学院で一緒に勤務した医師たちが病院長や部長クラスとなっておりましたので、基礎専門科目の講義担当の承諾を得ることができました。

ただ、一番苦慮したのは看護学担当教員でした。新設大学ゆえに文科省での教員審査で承認される人材を選ばねばならず、学歴・業績・臨床経験・担当科目との専門能力が問われ、その一方では仲間として協調性があり能動性のある人材採用の必要性がありましたので自ら面接しました。今まさに選りすぐりの自慢のできる看護学部の教員が揃いました。

2) 看護学部の教育の特徴と目指す看護師像

看護学部の目指す看護師像のもとになっていますのは、駒沢女子大学の建学の精神の道元禅師の「正念」と「行学一如」という禅の精神を基盤としており、大学の教育の目的である「国際化・情報化の進展、女性の社会参加の拡大など、急速な社会構造の変化にのぞみ、十分に自己を実現し、新しい文化の創造的担い手となる人間性ゆたかな現代女性を養成すること」(大学学則第1条)をもとに看護学部が誕生しています。

そこで、看護学部は「自己を見つめ、他者への思いやりのこころを備え、科学的根拠と専門的知識・技術に基づいた判断力と探究心を兼ね備えた看護実践者の育成」を目的としており(学則第4条の3の(9))、その看護学部の目的達成のために、看護学科を置き(学則第4条の2)、「教育の目的に則して編成された4年間の課程を学修し、卒業に要する所定の単位を修得することを学位授与の要件」としています。

看護学部看護学科では、「人間性豊かな質の高い看護実践能力を備えた看護師・保健師を育成する」ことを目的(学則第4条の3の(10))とし、その目的を達成するために、看護学科は、専門教育科目を通じて以下の資質・能力を養成することを教育目標としています。

1. 人間を全人的に捉えヒューマンケアを実践できる教養力と人間性の養成
2. 他者とバランスのとれた関係性を構築できるコミュニケーション力と社会性の養成
3. チーム連携と協働力をもとに看護の役割と機能を発揮できる専門力と判断力の養成
4. 多様な健康レベルの人々の課題に対し、根拠に基づいた看護実践ができる技術力と実践力の養成

このような教育目標に基づき、教育の特徴としては、学生一人ひとりの学修進度や将来の目標、個性を把握し、そのニーズや目的に沿ったきめ細かな総合的学修支援(テラーロードメイド教育)を行っております。すべての教職員が学生一人ひとりと向き合う教育ができるよう、アドバイザー制度を設け、1年次から4年次までを同じ教員が学習並びに生活指導・支援を行います。また、基礎ゼミ、看護研究などは少人数制(10名以下)のグループでおこない、アドバイザー教員並びにゼミ・看護研究等での少人数担当により学生の状況を多方面から把握し、能動的に自律した行動がとれるよう早めに対応でき

る体制を取れるようにしました。

看護学科の教育目標達成に向け、看護師育成を目指しますので、入学する学生には以下のような人材を求めることとしました。

1. 建学の精神に共感し、知性と理性を備えたところ豊かな人間形成を目指したいという意欲を有している人
2. 高等学校等において基礎学力をしっかりと身に付け、主体的に継続的に学習する習慣を有している人
3. 現状維持に満足することなく、何事にもチャレンジし変革を試みる気概を有している人
4. 人への関心と社会に貢献する意欲をもち、看護師を目指している人

3) 協力体制なくしては何もできず: チームワークの必要性

準備室1年目後半から文科省申請に向けて申請書作成があり、教員2名だけではどうにも申請書作成マニュアルに目を通しながらの作成は困難となり、看護学部専任事務職員の採用を要望しました。その人材こそ現在の看護学部設置に最高の助手である佐久間裕子さん（現主任）です。何かを成し遂げるには、信頼関係の上に協力体制なくしてできません。佐久間さんとの出会いも本当に一つの縁でした。北里大学看護学部の友人の1本の電話からでした。事務職としての契約更新が終わるがとても良い人がおり、そちらは新設大学なので看護学部の事務に長けた人は必要ないか、とのことでした。面接の際に、この人を逃しては惜しいと思い、即理事長に相談し、急遽、採用面接をお願いし、採用決定という超スピード人材採用でした。それだけの人材であったことは現在までに証明済みです。彼女のおかげでシラバス作成や実習要項作成に関するチェック、講義担当依頼書や実習施設への書類作成など具体的な資料作成に向け、設置

マニュアルに準じて適切に確認しながら進みました。その後、具体的な看護領域のシラバス作成や実習館の整備などの確認・購入物品・備品などの検討が必要となり、現職の小林小百合先生（老年看護学）、安藤郁子先生（基礎看護学）をお迎えし、開学の道へ本格的に進みました。

その一方で、中学校の校舎を看護学部実習館として改築する工事が始まりました。主に初年度より授業開始となり、学内演習で一番実習室を利用する基礎看護学担当の安藤郁子先生を中心に機器・備品等の検討が進められました。改築は一から設計するよりも難しく、いかに使い勝手の良い環境を創り出せるか、また必要な機器・看護備品等を設置できるかなど何度も業者との打ち合わせを重ねながら、現在の看護実習館の準備ができました。

大学にとって重要な知識の宝庫となる図書館所蔵の医療・看護に関する図書・雑誌等についての選定も始めました。何十枚もある図書リストに目を通し、精選しましたが、専門図書や視聴覚教材などは着任前の各専門領域の先生方に必要な看護備品等と一緒に確認していただく必要があり時間を要しました。そのため、開学前の年度より、着任予定教員との顔合わせや領域別での科目担当者によるシラバス確認等を数回行いました。そのおかげで、一部の先生には1期生の入試面接担当をお願いし、協力を得ることができました。

受験生募集については、文科省の開学認可報告を得るまでは活動ができず、学生確保を心配しましたが、開学4か月前に認可承諾を受けたのち、入試センターが着々と募集準備をされたおかげで順調に募集活動を開始できました。看護学部開学に向けて、多くの皆様方のご協力により成しえたものと、勝手ながら本紙面を介して心より感謝申し上げます。

ここからは、開学から完成年度までの4年間における学生及び教員の状況並びに変遷について記しておきます。

3. 開学1年目～4年目の完成年度まで

1) 開学1年目：2018年4月1日～2019年3月31日

文科省大学設置室より看護学部開設認可の通知を受け、初の1期生90名を迎えました。十分な入試広報ができない中、駒沢女子大学93年の歴史と入試センター並びに大学関係者の皆様のご協力により、看護学部の知名度がほぼ皆無にも関わらず、多くの受験者を得ることができました。本当に感謝しております。

初年度着任の専任教員は21名でした。一般教養1名、看護学専任教員は基礎4名、母性3名、小児2名、成人4名、老年3名、精神2名、在宅2名、地域1名、そのほか助手1名、看護事務職2名が加わり発足しました。その後、基礎看護実習に向けて専任助手3名が加わりました。

入学式の準備、入学後のオリエンテーション等、全教職員の協力のもと何とか事なきを得ず遂行できました。その後は、看護学部の組織運営を円滑に進めるため、其々の役割担当別にマニュアル作成や実習室整備などが行われました。

2) 開学2年目：2019年4月1日～2020年3月31日

受験者数は、前年に比して減少しましたが、定数に対して4.7倍の受験者に恵まれ、2学年が揃ったことで看護学部実習館が活気にあふれ大学らしい雰囲気となってきました。1期生は「基礎看護実習Ⅰ」を終え、今年度は「老年看護学実習Ⅰ」並びに「基礎看護学実習Ⅱ」を実践するため、学内演習や専門の授業が厳しくなりました。その一方で看護学を目指すことへの迷いを生じる学生が出てきました。

授業は看護専門科目が始まるため、その看護学専任教員が新たに9名就任し、総勢30名となりました。文科省教員審査申請した教員のうち、諸事情で本学着任ができなくなった教員3名分補充のため、新たな教員探しを始めることになりました。この1年間で看護系大学が290校近くとなり、なかなか文科省審査に耐えうる教員を採用することが難しくなってきた年度となりました。しかし、次年度より臨床実習が領域別にスタートのため、確実に実習指導要員が必要であり、専任教員と新専任助手及び非常勤助手とで学内技術演習や臨地実習担当を協力しながら学生に関わりました。

3) 開学3年目：2020年4月1日～2021年3月31日

この年は、COVID-19による感染拡大が起こり、入学式は中止、授業は対面から遠隔授業に切り替わるといった今まで経験したことのない社会全体が異常事態に包まれました。保護者会開催は昨年度実施し学生指導に効果を得たことから実施を期待しておりましたが、対面実施ができず、可能な範囲でリモート面談を各アドバイザー教員が実施しました。一方、学部長・学科主任は、事前に学部・学科説明の内容を録画し、オンデマンドで利用できるようにしました。

それでも有難いことに受験者は前年度より若干ですが増加し、定員を満たす入学者を得ることができました。しかし、大学側の対応としては感染拡大への政府見解等を加味しながら授業開始時期や方法などの検討をしていたため、ガイダンスや遠隔授業への切り替え準備も含め、授業開始が5月連休明けから徐々に開始する運びとなりました。看護学部にとって一番の気がかりなことは、後期から各領域別実習が実施できるかどうかでした。その臨地実習に向けて学内でどの程度の技術演習や看護過程展開などを

対面で可能なのか、またどのように教材・教具を工夫し授業展開したらよいかなど、専任・非常勤を問わず教員たちにとっては大変苦勞した1年となりました。特に新1年生は緊急事態宣言発令後、大学の入構禁止の措置がとられたため、不安や大学への不満が高まり、保護者からのクレームも見受けられるようになりました。それでも、本学並びに看護学部は最大限の環境調整に努め、可能な限り学内演習を少人数制で実施し、臨床からの実習受入れ中止等がない限り、短時間でも短期間でも臨地での実習をさせていただき、臨地実習が中止となった学生には臨地実習に近い状況下での学内演習を実施しました。

さて、このような事態のなかで欠員教員のある領域（基礎1名、在宅1名、精神1名）に、新たに仲間を採用することができました。その一方で家庭の事情や教員自身の健康状態等により退職を余儀なくされた教員も出てきました。開学3年目はこのような教員の状況と、進路変更で悩んだ末に退学する学生も目立ち始めた年度でとなり、とても残念な気持ちとなりました。人の一生の中では様々な出来事に遭遇し、自ら解決しなければならないことは沢山ありますが、縁あった本学部で出会った教員や学生たちとはまたいつか、看護学部同窓会が開催される機会ができたときには是非お目にかかりたいと思います。

4) 開学4年目：2021年4月1日～2022年3月31日

4学年揃った完成年度の年となりました。コロナ禍にありながら受験者が増加するのか、減少するのか不透明な年明けとなりましたが、前年度並の受験者がありました。入学手続き率の推測が難しい中、妥当な合格者数を決め定員に近い入学者を算出しましたが、コロナの影響による地元志向なのか、経済的負担を避けるため

なのか、3月末に辞退者が想定外に増えました。この教訓を生かし、次年度からは今まで導入していない補欠入学の対応をすることで入試センターと合意をしました。

専任教員については、適切な人員確保のために欠員のある在宅、小児、成人、公衆衛生看護領域に教員を補充し、次年度（2022年度）より旧カリキュラムと新カリキュラムが並走して授業が進むため、さらに成人1名、在宅1名の教員補充をおこないました。

しかし、完成年度においてもなお退職年齢の教員のほか諸事情で退職せざるを得ない教員はいましたが、次年度に向けては看護学部を背負って立つ30代の若き専任教員たちを迎えることができます。

4. 看護学部教員における公的研究費並びに学内研究費の獲得状況

看護学部開学後4年間において、臨地実習施設の開拓やコロナ禍における授業準備・演習・実習等の調整などでほぼ2年間は落ち着いた状況が続きました。そのような中においても教育はもとより大学教員の使命として多忙の日々においても地道に努力を重ね、その成果を質の高い看護実践や日々の教育に活かす努力を行っております。

1) 4年間における科学研究費の獲得状況

基盤研究B

他大学との研究分担1件：精神

基盤研究C 一般

研究代表者5件：(内訳) 母性2・成人1・精神1・公衆衛生1

他大学との研究分担5件：(内訳) 母性2件、成人2、小児1

若手研究

代表研究者4件：(内訳) 小児1、母性1、

成人1、老年1

2) 学長裁量経費の獲得状況

7件：(内訳) 成人3、基礎2、小児1、
母性1

今後もより良い質の高い看護実践を目指して、
其々の教員が日々の生活の中から課題・問題を
見出し、研究できる時間を確保できるように努
めたいと考えております。

5. おわりに

このような準備室から完成年度までの振り返
りをする機会を与えていただきました研究紀要
部会に感謝いたします。

2月には、1期生が受験する本学にとって初
の看護師国家試験（一部学生は保健師国家試験
も）があります。全員合格を目指して、国家試
験対策部会の先生方を中心に専門基礎ご担当の
非常勤の先生方、そして看護学部の先生方の協
力・支援のもと、よい報告ができますことを
願っております。

今後、月日の経過とともに大学の組織体制や
教職員の変化、また教育課程の変更などがあろ
うかと思えます。どのような事態が起ころうと
も動じず、駒沢女子大学看護学部の良き伝統を
守りつつ、悪しき伝統は振り払い、新しき伝統
を造り挙げていく必要があります。今後とも看
護学部の歴史を「紀要」を通して教材研究や看
護が実践の科学であることを追求した成果を残
していくことは大切であり、今後10周年・15周
年・20周年・・・と本学の過去を振り返ること
で将来を見据えた教育研究に役立てることがで
きる看護学部の歴史を紐解く紀要であり、また
記念誌発行の際にも役立てることのできる紀要
であることを期待していただきたいと存じます。